

V120c SKA1 サブプロジェクト科学部門報告 2025 春

町田真美、廣田朋也、寺家孝明、藏原昂平 (国立天文台)、高橋慶太郎 (熊本大学)、今井裕 (鹿児島大学)、酒見はる香 (山口大学)、他 SKA1 サブプロジェクト

SKA プロジェクトに向けた科学検討の進捗を報告する。2024 年度は、宇宙磁場の国際会議 (5 月)、星間現象の国内会議 (9 月)、宇宙再電離の国内会議 (8 月)、SKA サイエンス会議 (12 月) の企画運営に協力した。SKA サイエンス会議では、2025 年 6 月にドイツで行われる国際 SKA サイエンス会議参加に向けた議論を行い、日本のサイエンスの強味を確認し、また、キーサイエンスプロジェクト参画に向けた検討を行った。コミュニティが初期科学観測参加するための準備の一貫として、MeerKAT プロポーザル講習会 (7 月)、SKA1 感度計算機利用説明会 (11 月)、偏波解析講習会 (2 月) を開催した。MeerKAT プロポーザル講習会においては、プロポーザルの書き方、感度計算の講習のみならず、個々のプロポーザル作成にも協力し、その結果、3 件のプロポーザルが採択されるなど、着実に成果を上げている。コミュニティに対して行った業績調査では、2023 年度における競争的資金の獲得は 1 億 350 万円 (間接経費込)、学生輩出は博士 2 名修士 12 名であった。査読論文数は 36 件と前年度までの平均より若干減少したが、2023 年 2 月 (2022 年度) に PASJ 誌に特集号を刊行したことで成果が前倒しされたためと考えている。獲得資金総額が 1 億円を超えた要因は基盤 A が 4 件、基盤 B が 5 件、創発的研究支援事業が 1 件など、比較的規模の大きな経費が複数採択されているためである。7 月に開催されたシンポジウムにて要望が出た、コミュニティの横の連携を強固とし科学コミュニティの議論を活性化するためのツールとして、専用の Slack Workspace を立ち上げた。